



至誠・致知・鍛錬

甲斐市立双葉中学校
学校だより
発行 校長 中村 忍
平成29年度 第15号
3月23日発行(最終号)

「感奮興起(かんぶんこうき)」何かを感じとった時、自分もうかうかしておれないと奮い立つこと。苗のまま終わるか、穂を出しただけで終わるか、それとも実を結ぶ者になるか、心のスイッチをオンにして、人生を輝かせる道を歩んでいきたい。



「双葉中学校卒業証書授与式」

3/13(火)に、飯室 崇 副市長様、柳本 博美 教育委員様をはじめ、多数のご来賓と保護者の皆様にご出席いただき、「平成二十九年度双葉中学校卒業証書授与式」を挙行了しました。

卒業生のみなさんには、以下の話をさせていただきました。

- 義務教育終了という、人生で最初の大きな「節目」の日を迎えるまでには、たくさんの方々の愛情と支えがあったことに感謝し、「ありがとう」の気持ちを伝えてほしいこと。
- その恩に報いるために、自らの意思と判断と責任において、人生を切り拓いていく立派な大人となってほしいこと。
- 義務教育を離れ、激しく変化する未来社会では、無限の可能性という太陽の光がふりそそぎ、楽しいことや嬉しいこと、希望に満ちあふれた日々が待ち受けている反面、つらいことや厳しいこと、先が見えないことも、それ以上にあるかも知れないこと。
- 春になると華やかな花を咲かせる桜の木も、厳しい冬の寒さを堪え忍んで、はじめて美しい花を咲かせるように、人間の値打ちも、楽しいときや嬉しいときよりも、むしろ苦しいときや辛いときのふんばりにこそ、その真価が表れること。
- つらいときは、支えてくれている人を思い出し、仲間とつながりること。それは、いつでも、どこでも、誰とでもできること。そして、共に考えることによって、最善を判断し、知恵を生み出し、人としての根をしっかりと根をしっかりと、自分らしい鮮やかな花を咲かせてほしいこと。
- やさしいまなざし、あたたかい言葉、素敵な笑顔で、人生に喜びの種をまき、喜びの花をいっぱい咲かせてほしいこと。
- この双葉中学校は、みなさんの「母校」なので、困ったとき、苦しいとき、辛いとき、悲しいときは、いつでも帰ってきていいということ。



卒業生のみなさんの前途に、幸多からんことを祈念しています。

「小学校卒業証書授与式」

3/20(火)に、双葉東小学校、双葉西小学校で「平成29年度卒業証書授与式」が挙行されました。小学校課程を修了し、成長した卒業生のみなさんから、感動

をいただくと共に、頼もしさを感じることができました。

落ちついた態度と、そのりりしい姿から、入学が待ち遠しくなりました。双葉中学校での活躍を大いに期待しています。



「自転車安全集会」

3/8(木)に、「自転車安全集会」を行いました。自転車通学をしている生徒全員を対象に、担当教師から、注意事項を伝えました。

右側や歩道を通行する場合は、自転車をひいて通行することの徹底を図りました。最近、右側通行による乗用車との接触事故が起きています。今後も、生徒の安全確保に向けて、全力で取り組んでいきたいと思ひます。



「峡北中高生指連絡協議会」

3/16(金)に、事務局の双葉中学校で、「峡北地区中学校高等学校生徒指導連絡協議会」を開催しました。

峡北地区の生徒のため、中学校と高等学校が連携を密にして情報交換や相談をする中で、生徒に素晴らしい未来が開けるように進めていきたいと思ひます。



「PTA新旧役員会」

3/2(金)に、平成29年度のPTA正副会長さんと平成30年度のPTA正副会長予定者の10名による顔合わせと引継の会を行いました。和やかな中で、来年度のPTA活動を楽しく充実したものとなるように、話し合いが行われました。教職員と保護者がチームとなって、双葉中学校PTA活動が、更に発展するために、役員のみなさんが、教職員と保護者の橋渡し役をしていただきながら活動して行ければと思ひます。



「修了式」

3/23(金)に修了式を行いました。新年度に向けて以下のことを生徒に話をしました。

最近読んだ本の話です。木村ひろこさんという生まれながらの脳性小児マヒの方の話です。手足は、左足が少し動くだけ、ものも言えません。三歳で父親を亡くし、十三歳で母親が亡くなりました。少しだけ動く左足で米をとぎ、左足で墨をすって、墨絵を描き、その絵を売って生計を立てていました。自分のためだけに生きるのでは、芋虫と同じだと、少ない絵の収入から、毎月からの不自由な人のために寄付をしたそうです。彼女は言いました。「私のような人間は、脳性小児マヒにかからなかったら、生きるという尊さを知らずに過ごしたと思う。脳性小児マヒにかかったおかげで、生きるということが、どんなに素晴らしいかということを知らせていただきました」と話されました。

○ 世界でたった一人の自分をどんな自分につくり上げていくか、その責任者は、生徒のみなさん一人ひとりであるということ



もうひとつは、ちょっと古い話になります。今から6年前、42年も続いた水戸黄門が終わりになってしまいました。毎回楽しみにしていただけに本当に残念です。悪代官が金に目がくらみ、弱いものに悪さをするとところを、「控えおろー」と葵の印籠をかざして黄門様が助けるいつものパターンが大好きでした。番組の終わりに当たって、水戸黄門役の里見浩太郎さんは、「人にとって本当のしあわせは、お金持ちでも、身分が高いことでもない。それは、人に必要とされていることである」と話されました。水戸黄門という時代劇が、番組として必要とされなくなったことが、とても悲しいということでした。

○ みなさんも新年度を迎えるにあたり、友達に必要とされる人間となって、自分をつくりあげてほしいということ

「新たな年度を迎えるにあたって」

冬季オリンピック(ピョンチャンオリンピック)を終えて
～日本人ファンのマナーが海外で称賛された理由～

こんな題で、米スケート専門メディアが特集を組み、今季のフィギュア界を総括している。日本人ファンの観戦マナーについて、「素晴らしいスポーツマンシップだ」と報じた。

フィギュアスケートの羽生結弦選手がオリンピックで2大会連続の金メダルを獲得し、国民栄誉賞が検討されている。世界中から注目され、日本人ファンにとっても誇らしいシーズンとなった。その会場での日本人のファンのマナーに対して、海外でたくさんの称賛の声が上がっているようだ。

世界の若手選手が躍進する中、「スケート界が新たなファンを獲得しようとしているタイミングで、日本人スケーターが成功することほど素晴らしいことはない」と言及している。それは、日本人ファンの行動にも触れていた。ピョンチャンという海外まで、応援に駆け付けた多くの日本人ファンに着目したのは、ファンが手に持っていた“ある物”である。

それは、「母国の国旗だけではなく、他国の国旗も持参し、素晴らしいスポーツマンシップに溢れた観戦を行った」ということである。日本の選手のみならず、アメリカ、カナダ、中国、ロシアなど、あらゆる国の選手が世界を目指して一堂に会し、しのぎを削るオリンピックで、日本人ファンは自国の国旗だけでなく、他国のものまで持って観戦していたといい、その精神に心を打たれたとのことだった。

「日本人ファンに対して、国際スケート連盟は『ドウモアリガトウ』と何度も、何度も繰り返し伝えるべきだろう」そう締めくくられていた。世界中から注目されたスポーツマンシップあふれる日本人のマナーは、これからのスポーツ観戦の在り方を変えていく大きな力になっていくと思われる。

この日本人ファンの行動は、教わってきたことや教えてきたことではなく、古くから伝わる日本人の生き方やマナーが、日本のスポーツ界に脈々と流れているものだと思う。「讃えられる自分がいるのは、対戦相手のおかげ、そして、支えていただいた全ての方々のおかげ」という相手への感謝の気持ちをもてるのが、わたしたち日本人である。

ピョンチャンオリンピックの日本人ファンの行動は、とてもすがすがしく、日本人として生まれてきた誇りを感じることでできるワンシーンとなった。

双葉中の新たな平成30年度が、すがすがしい気持ちでスタートできる原動力となった。



表彰等

全国都道府県対抗中学生ソフトテニス大会出場	2年
やまなし環境美か推進ポスター	入選 1年
山梨県野球連盟	優秀選手 3年
山梨県陸上競技会	功績賞 3年 3名

「チーム双葉中」

教職員42名 生徒455名 保護者423名が

「チーム双葉中」として取り組んでいます。

学校住所：〒400-0106 甲斐市岩森1337

電話：0551-28-2019 FAX：0551-28-5689

ホームページ <http://www.city-kai.ed.jp/fchu/> も併せてご覧ください。